

2020年6月26日

2020年6月 Nr. 471

さて、今回は、古代ゲルマンの神々やその信者たちが話題となっています。

「♪わたしは彼女をメキシコのどこかで1人だけで見つけた、そうアニータを」このドイツ語のヒット曲をこう歌ったギリシャ人のコスタ・コルダリス (Costa Cordalis) は、2019年7月2日にスペインで亡くなりました。この曲は、コルダリスの最大の成果でした。コルダリスは16歳の時フランクフルト・アム・マイン市へやって来て、ゲーテ・インスティトゥートでドイツ語を学びました。ドイツ放送にとってコルダリスの75歳での死亡のニュースは重要でしたので、翌7月3日のニュース番組においてすぐに取り上げられました。そのニュース番組に続いて20時10分には毎週の水曜日にならってシリーズ番組 „Aus Religion und Gesellschaft“ (「宗教と社会から」) が放送されました。

20分間のこの放送においてはゲルマン人の古代の神々の復興が話題になっていました。ドイツでは古代の神々を信ずる異教徒たちは多くはいませんが、北欧ではデンマーク、ノルウェー、アイスランドおよびスウェーデンにおいて異教徒たちが一般に認められた宗教団体にさえなっています。オーディン (Odin)、言い換えればヴォータン (Wotan) は、最高神です。その下にフレイヤ (Freya) という愛と婚姻の女神が来ます。オーディンから人々は古代ゲルマン人の文字、ルーン文字を得たと言われています。この文字のアルファベットはこの宗教の信奉者により歌われもします。これは彼らにとってルーン文字のアルファベットを覚えるのに好都合です。

トール (Thor) は雷神であり、ハンマーを持っています。トールの父親はオーディンです。トールに因んで第四番目の曜日が命名されました。人は旅行を計画する場合、トールに呼びかけます。中にはトールに住居の保護も請う人もいます。アース神族は北欧において最強の神々の家系と見なされています。トールはその家系の偉大な戦士です。トールのハンマーは、人が首に掛けることができる装身具としても存在します。しかしながら、祖先崇拜も神々の崇拜の一部です。人は食事の際に死者のために席を空けておき、死者用にテーブルに皿、つまり「先祖用の皿」 („der Ahnenteller“) も置くことにより、死者を偲びます。

「アース神族を信奉する」異教徒たちは自らをアザトゥルー (Asatru) と呼んでいます。これはデンマーク・スウェーデン語の新しい言葉です。約100人のドイツのアザトゥルーが2019年にヘッセン州のYMCAの休暇村に集まりました。自由時間と称するキリスト教信

者の会合と似たようなもので一緒にキャンプファイアーで歌ったり、ダンスコース、森への散歩、ヨガをしたりするためでした。またキリスト教についてのテーマの講演ではなく、熊崇拜 („Bärenkulte“) や異教徒の聖職者についての講演を聴くためでした。

アザトゥルーはしかしながら、特に自ら考え出した儀式を催すために集まります。つまり伝承は殆どされません。というのは、古代ゲルマン人は、ほんのわずかししか書き残しませんでしたし、どこかの木の枝にルーン文字で刻み込んだものでも、すべて失われてしまったからです。古代ゲルマン人においては、その大部分は大抵口頭で伝承されました。そしてキリスト教の普及により、古代ゲルマンの儀式については伝承されるものがますます少なくなっていました。これは、人が伝承にしばられていることを感じないで済みますし、儀式を自ら生み出すことができるという利点があります。

彼らの協会・組織 („Eldaring“) において会員の面々は、互いにファーストネームで話しかけますが、別の名前を選び出すこともできます。ダニエラさんと言う女性会員は、健康の女神に因み自らをアイラ (Eira) と名乗っています。ダニエラさんは、古代の北欧の神々を信じており、自分の信仰は神々が自分を呼んだという感覚を持っていることにあるといます。女神フレイアはダニエラさんのすべての人生の場面において信頼を置ける対象となっています。キリスト教では唯一の男性神しかいないのに対し、アザトゥルーがダニエラさんにとって大きな利点は、女性の神々も存在する点にあります。ダニエラさんは女性の神々に対しても願い事をします。

今週末に総会のために休暇村に集ったこの協会・組織は、350名の会員を擁しています。この協会・組織はこの種のものではドイツでは最大級です。ボルテさん (Frau Bolte) が会長を務めています。書店で古代ゲルマン人の宗教、例えばエッダ („Edda“) に関する本がボルテさんの注意を引きまし。ボルテさんがそこで読んだものは、なぜか理由はわかりませんでしたが、心に残るものがありました。なぜそのようなものが今日もなお人の心を動かすことができるのか、どのような影響を及ぼすのか、ボルテさんは自問しています。ボルテさんは民俗学者として、異教徒の伝統にならい、古代の神々を崇拝しているインドの部族社会を知るようになりました……。

さて、課題の冒頭で言及されているコスタ・コルダリスは70年代以降多くのヒット曲を世に出し活躍したようですが、洋楽に詳しくない私は当時も現在もその名前さえ聞いたことがありませんでした。私にはドイツ語圏の歌手としてはオーストリア出身のウド・ユルゲンスのほうが馴染みがあります。やはり日本の音楽バンド「ペドロ&カプリシャス」がカバーした楽曲の原作者がウド・ユルゲンスであるためだと思います。コスタ・コルダリスとはどのような歌手だったのか、インターネットで検索をしてみました。動画サイトで

1976年版のものを閲覧できましたが、黒い長髪でらっぱズボンを穿いた個性的な風貌の彼がギターを抱えて楽しそうに観客と„Anita“を歌う姿が印象的でした。死亡翌日には、ドイツのZDFニュースにおいてもかつて出演したHitparadeという番組が再放送され、コスタ・コルダリスを偲んでいました。何かを調べたいとき以前行っていた図書館や書店での調べ物ではこのように簡単にはコルダリスについて調べられませんでしたので、今回もインターネット検索の便利さを改めて痛感し、感謝しました。

ところで、今回宗教が話題になっていますので、ドイツの宗教別の信者数について調べてみました。ドイツでの宗教別人口の割合については、私は「カトリック、プロテスタントが主流で、移民の流入に伴いイスラム教が増えている」という程度の理解でした。ところが、ドイツの宗教事情について改めて調べてみますと、Wikipediaによると、2018年においてカトリックが全人口の約28%（約2,300万人）、プロテスタントが約25%（約2,100万人）、その他のキリスト教を加えても全人口の約56~57%（約4,700万人）ということでしたので、私にはキリスト教全体でも意外と少ないと感じました。これにイスラム教徒が約5.4~5.7%（約440万人から470万人）と推定（ただしデータは2015年）され、さらに仏教、ユダヤ教、ヒンズー教などの他の宗教は合計しても全人口の1%未満のようです。今回登場する古代ゲルマンの神々を信ずる人たちの割合もこの1%未満の中に含まれますが、会員数は全体からすればきわめて少数です。ではこれらの他は何が占めているかというと、とても驚いたことに、無宗教 („konfessionslos“) が何と全人口の約37~38%（3,100万人）を占めており、別の資料によればその割合は1970年代から急激に増加しているようです。教会税 (die Kirchensteuer) を支払うのが苦で教会から離脱する人も多いということを以前どこかで聞いたことがありますが、これが主因かどうかは分かりませんが、無宗教の人々がこれほど多いとは想像もしませんでした。

また、放送においてEldaringのメンバーの多くは、自らの信仰を他者に隠したいと紹介されていましたが、やはり心の片隅に自分が特殊な存在であると見なされたくないという気持ちがあるものと思われれます。それほど認知されていないのだろうと思いますが、そうだとすると放送で「古代の神々の復興」 („die Renaissance der alten Götter“) という表現がちょっと大げさな響きを持って聞こえてしまうのは私だけでしょうか。

さて、今回Heideという語が登場し、「異教徒」という意味で使われています。しかし一方で、Heideが女性名詞で使われる場合、「荒野、原野」という別の意味があります。個人的なことになりますが、私が学生時代（1970年代）にリューネブルクのゲーテ・インスティトゥートに語学研修をした際、リューネブルクにはdie Lüneburger Heide（「リューネブルクの荒野、荒地」）という自然保護地区が身近にあり、ゲーテ・イ

ンステイトウートの Ausflug でもその地に遊んだこともありましたが、私にとっては Heide はまず「荒野、原野」という意味で記憶していました。Heide には男性名詞で「異教徒」という意味もあることを知ったのは、その後大分後になってからでした。一般的にはドイツ語学習者が最初に学ぶのはおそらく、文法の男性弱変化名詞の項での Heide の方だろうと思いますが、私の場合は上記の事情により、女性名詞の Heide でした。また、今回登場した意味での Heide についても私には発見がありました。改めて手元の辞書を調べてみると、異教徒とは、「キリスト教、ユダヤ教、イスラム教からみた場合を指し、特に多神教の教徒をいう」という解説が掲載されていました。私はこれまで Heide 「異教徒」とは、キリスト教以外の宗教全般を指すと理解していましたので、その理解の誤りを修正する機会を得た次第です。

K. K.

2020年7月23日

2020年7月 Nr. 472

今回は、「老いと死」が話題となっていますが、収録されている箇所は「年老いてからの生活」について交わされた、ある母親と取材記者でもあるその娘との話に焦点が当てられています。

ハインさん (Frau Hein) は介護コンサルタントです。介護が必要になったときどうすべきか、ハインさんからアドバイスをもらうことができますし、要介護者の家族もハインさんのもとを訪れます。ハインさんが事務所を構えている所には以前は商店がありました。2019年の6月末には既にハインさんの事務所は閉鎖されていました。なぜならばハインさんが休暇を取ったからです。ハインさんが事務所を構えている建物の裏には、舗装されていない通りの端に低い小さな建物があります。そこでは5人の高齢女性が住んでいます。彼女らは長い間ハインから介護相談を受けている顧客です。

彼女らはそこでシェアハウスに住んでおり、東欧出身の二人の介護従事者から世話を受けています。しかしながら介護従事者は常に交替します。なぜならば、彼女たちは一時的にしかドイツにいられないからです。その多くは、ポーランド出身ですが、それぞれドイツに1ヶ月間だけ、自分自身もひょっとして要介護者を抱えていると思われる自国に1ヶ月間だけ滞在しています。

高齢者用のシェアハウスでは通常、一つの高齢者のグループが自らすべてを整えることになっています。しかしながら、この5人の代わりに、すべてハインさんが手はずを整えました。この高齢者の皆さんは、しかしながらまだ活動的ですし、昼食も自分たちで作ります。昼には彼女たちは二人の介護従事者と一緒に、つまり7人で一緒に食べます。高齢者の皆さんは料理を始める前に、5人でテレビの前に座っています。しかしながらテレビ番組に集中しているわけではありません。まどろんでいる人もいれば、クロスワードパズルを解いている人もいます。

この放送の取材記者であるバイエルン放送局の若い女性は、両親が年老いた場合、どのように生活するつもりか心配しています。女性記者の母親はアニアという名前です。50代初めです。彼女はベルリン市の町外れの田園地帯の建物を相続し、ある合唱団の一員です。母親は60歳を超えたら、晩年を謳歌したいと考えています。大いに旅行したい、本もたくさん読みたいと思っています。しかしながら、たぶんいつの日か要介護状態にもなるでしょう。統計によれば、母親は、その夫すなわち記者の父親より5~6年は長生きし、73歳位

で亡くなるでしょう。

しかしながら、母親は、人生の最晩年の数年を寡婦として介護施設で過ごしたいとは思っていません。自分が相続した家に住み続けたいと思っていますが、その場合は娘がミュンヘンからでは母親の世話をできないだろうと思われます。母親は現在既に、骨の問題を抱えています。これが本当に悪化した場合、自宅内でもはや階段がのぼれなくなるでしょう。それでも転居する意志は全くありません。

従って、母親は、現在自分たちが住んでいる場所に、階段をのぼる必要がなく車椅子で快適に移動できる家を作ることを思いつきました。そうすれば両親は相続した家を人に貸して、この新しい家に移りすむことができます。すなわち、転居する必要がなく、現在住んでいる場所にとどまれます。

しかしながらこれは経済的な観点から難しいだろうと思われます。彼女の夫はフリーランスの仕事に就いており、年金保険の保険料をほとんど支払う必要がありませんでした。従って、年金生活者としては月に 400 ユーロ位しか受給できません。家を所有して、その結果家賃を支払う必要がないとしても、これでは暮らしが成り立ちません。夫妻には 2 人の娘がいますが、母親はその娘たちと一緒に暮らす気はありません。娘たちが生まれてから思春期が終わるまでの 20 年間一緒に生活しましたので十分だと母親は言います。それに加え家族を介護している人の 70%は、介護と仕事の両立は中々難しいと言います。多くの人々にとって、介護はとても大きな負担となりますので、労働時間を減らさなければなりません。

若い女性記者のハイムさん (Frau Heim) は、両親を訪ね、母親と一緒に冒頭に登場の介護コンサルタントのハインさんのところに助言を求めるために車で向かいます。ハインさんはその 2 人にまず、そこで 5 人の高齢者の女性たちの生活振りを紹介します。いずれの入居者も自分自身の部屋がありますが、浴室は共用となっています。いずれの入居者も自分の部屋の内装は自分でしつらえます。例えばポージーさん (Frau Poser) は、床まで達する大きな窓に自分のかつての住まいの寝室から持ってきたカーテンを備えつけましたし、慣れ親しんだテレビやフロアスタンド 1 台もここに持ってきました。これらはポージーさんに昔のことを思い出させてくれます。

さて、ハインさんが 5 人の高齢者の入居のために尽力した高齢者向けシェアハウス (Senioren-WG) に入居者がかつて自分の部屋にあったカーテン、テレビ、フロアスタンドなどを持ち込んだという話がでできます。高齢者にとっては転居自体が大きなストレスになると聞いたことがありますので、環境が変わる中でも馴染んだ家具や電化製品が身の

回りに存在することは過去を思い出すことができるだけでなく、見慣れたものが身近にあることの安心感も大切だろうと思います。また、転居ではないのですが、住環境が変わると言う意味では、高齢者の入院もこれと似たところがあるようです。何らかの病気が原因で高齢者が入院すると、筋力低下だけでなく、認知症を発症することがあるというのもよく聞く話です。

また、介護と仕事の両立に関しては日本でもたびたび取り上げられており、大きな問題となっています。また、要介護者数も放送当時の2017年ドイツでは340万人おり、2030年には500万人超と見込まれるようですが、日本でも2017年に640万人だった要介護者が2030年には800万人超という推計があります。日本の数字は要支援という要介護よりも軽度なカテゴリーも含んでおりますのでドイツの数字と単純に比較はできませんが、それにしても膨大な数の要支援者を含めた要介護者が現在もいますし、高齢化の進展に伴い今後とも更に増えることは間違いありませんので、暗澹たる気持ちになります。

ところで、今回の放送は2017年の再放送と言うことですので、それから約3年を経た現在、ハイムさんと母親の話し合いはその後どのように展開しているのでしょうか。母親は現在「骨の問題」を抱えています。将来これが悪化するとしても、介護施設に入居するのではなく、車椅子でも移動が可能ないわゆるバリアフリー住宅を新たに建てて備えたいとのことでした。確かに高齢者にとっては、生活環境を大きく変えないで済む現地で生活を継続したり、近所付き合いを維持したりすることは重要な事だろうと思いますが、ハイムさんの母親の場合、資金的にはどうも厳しそうでした。しかしながら母親の気持ちは固いと思われ、母親の計画が実現した場合、ハイムさんとしては少しは当てにしていた親の財産の相続もなくなりますので、複雑な気持ちだろうと思います。その後母親が同じ考えを持ったままなのか、また父親はどのような考えを持っているのか、興味がわくところです。

また、母親の上記の「骨の問題」とは具体的には何を意味するのでしょうか。どのような健康状態を指すのでしょうか。おそらくプライバシーの問題があるため、放送では具体的には言及されなかったのだらうと思いますが、この語を聞いて私は日本でも高齢者において問題になっている骨粗鬆症（Osteoporose）を思い浮かべました。「骨に問題がある」（Schwierigkeiten mit den Knochen haben）と聞いた時に、ドイツ語ネイティブスピーカーの大多数が最初に思い浮かべるのはどのような状態または病気でしょうか。

今回の放送・課題に登場する介護コンサルタントのハイム（Hein）さんと女性記者のハイム（Heim）さんの名字の発音が非常に似かよって戸惑いました。綴りを見れば違いは明確なのですが、発音をだけ聞くと私にはとても紛らわしく聞こえました。これに加え

ファーストネームがハインさんはヤナ (Jana) で、ハイムさんはハンナ (Hanna) となっており、こちらも綴りは異なっても発音としては似かよって聞こえます。今回の登場人物の 2 人の名字とファーストネーム (Hanna Heim と Jana Hein) 共、綴りは異なるにもかかわらず、発音としては似かよっていると思いましたし、両方を続けて読む場合、私には早口言葉 (Zungenbrecher) のようで発音しにくいと感じました。

ところで、今回放送で出てくる sich auseinandersetzen という表現は、ドイツ語学習者にとって理解しにくい単語の一つではないかと思います。Beiheft の 35 ページ (名詞形の Auseinandersetzung で登場) と 45 ページの二箇所に出てきます。それぞれ注釈が掲載されていますが、異なった意味で使われています。両方とも mit を伴いますが、「mit + 人」の場合と「mit + もの」で意味が異なります。手元の辞書で例文を捜しましたところ、以下の通り掲載されていました。

sich mit dem politischen Gegner auseinandersetzen 「政敵と論争する」

sich mit dem Problem auseinandersetzen 「その問題に取り組む、その問題をじっくり考える」 (以上は独和辞典より)、Ich habe mich lange mit diesem Philosophen (=mit seinem Werk) auseinandergesetzt. (Duden 独独辞典より)

これを機会にこの単語を改めてしっかり理解しておこうと思います。

K. K.

2020年8月28日

2020年8月 Nr. 473

今回は、句読点 (Satzzeichen) についてその歴史や重要性が話題となっています。

言語による情報伝達 (コミュニケーション) は、口頭で行われますが、文書によるものもますます増えています。聞いて理解すること (聞き取り) は聞こえる音声だけに基づいているのではなく、話し手がその声のトーンを上げたり、下げたりする様子、ある言葉を強調したり、弱めたりする様子、どこでポーズ (間) を短くしたり、長くしたりするかなどを聞くことにも基づいています。話される言葉 (話し言葉) は、話し手により構成・構築されます。ミュンヘン大学のシャラート (Schallert) 教授 (ゲルマン言語学) は、文にはメロディーがあります、という意見です。書かれている言葉 (書き言葉) においてもメロディーを伝えるために句読点が用いられます。

句読法の歴史においてシャラート教授は、常に何かに変化し、新しいものが生まれることにより、調整されない過程として生じるある種の文化的な進展の例を見て取っています。

中国語においてはそこで言われたことを文字で識別するのに対して、書かれたことばに文字や句読点がある場合、書かれたことばを話し言葉に戻って変換しなければなりません。

最初の頃は書かれたテキストはほんの僅かしかありませんでしたし、大抵の人は読むことができませんでした。テキストに何が書いてあるかについては、誰かがそのテキストの内容を読んで聞かせることによってのみ大抵の人は知り得たのでした。しかしそうするとそこではイントネーション (抑揚) が正しい必要がありました。読み上げられたものを聞いて理解するためには、つまり間接的には、句読点が大変重要となります。古代の弁士たちは、レーゲンスブルク大学のレスラー (Rössler) 教授 (言語学) の見解によりますと、言いたいことを予め書き留めておき、そうしてからそれを読んで聞かせたといいます。読んで聞かせる際には、文が終わる場所について句読点により識別できたでしょう。その結果、弁士たちは文章の終わりに向けて適時に声を下げ始めました。また、ダッシュは、弁士たちが読んで聞かせる際にどこでポーズ (間) を置かねばならないかを弁士たちに示したといいます。

しかしながら、古代の弁士たちは今日ほど多くの句読点をまだ自由に使いませんでした……。僅かな人しか手にいれられない書かれたものにおいては、読み手は、読み手の前に見えるもの、それが何を意味するか、そこに書かれているものが読み手に明確になるまで長く考えます。そしてこれは、どのようなイントネーションがそれに必要であるか、読み手に明確になることも意味します。テキストが印刷されるようになって以来、多くの人が多くものを速く読みたいと考えています、そして句読点により読解は楽になっています。

レスラー教授は、句読法の歴史、つまり句読点を付すことの歴史についても研究してきました。句読法は、ピリオドを用いてテキストを構成する多くの文がどこで終わるのか、ピリオドによって知らせることからスタートしました。この方法により読み手はそれぞれの一文に集中することができます。

アルファベットの文字体系を有する言語においては今日、大文字と小文字を使用しますが、当初は大文字しか存在しませんでした。大文字は単語間でのスペース（間）を置かず並んでいました。しかしながら、約 2,600 年前に単語を *Einstiche*（鉄筆などで印をつけること？）により互いに分け始めました。*Stechen* はラテン語で *pungere* と言います。そこからそのような *Einstiche* に対するラテン語の *punctum* が生まれます。しかしながらますます多く書かれるにつれて、単語の 1 スペースを互いに空けるだけになり、文章の最後にピリオドを使用するだけになりました。

この放送においては単語間のその空きスペースは *Leerzeichen* と称しています。なぜならば、その空きスペースは文字がなく、句読点もない箇所だからです。この放送では 3 つの句読点について言及されていません。すなわち、それらは引用文の始めと終わりを指し示す引用符、疑問符それに加えセミコロンです。コンマは話す際にそこで声を少し高め、この声を聴いた人は、例えば副文がまだ後に来ることに気づきますし、ピリオドはその文が終わりであることを伝える一方で、セミコロンは文が文法的には終わっていますが、内容的にはそうではないところに置かれます。そこでは話す際には声をコンマの場合よりより少なく高めますが、ピリオドの場合ほどは落としません。

意味するところをまずはイントネーションで表す文中にはあります（例えば以下の文例ですが、イントネーションを文字で表現することは難しいので、ここでは実際の音声を聴いてみる必要があります）。*Die Schüler sagen, die Lehrer haben es gut.*（生徒たちは、先生たちが恵まれていると言います）、と言う人は、*Die Schüler, sagen die Lehrer, haben es gut*（生徒たちは恵まれていると先生たちが言っています）、ということを意味していません……。

さて、当初の文章においてはアルファベットの太文字しか存在せず、しかもその太文字は単語間でのスペース〔間〕を置かず書いてあったとのことですので、さぞ読みづらかったと想像されますし、読むのにその分時間がかかったのではないかと思います。今回の放送・課題を機会に句読点の歴史を振り返ってみますと、紀元前 6 世紀頃最初にピリオド (Punkt) が生まれ、その後 9 世紀頃コロン (Doppelpunkt) が、そしてその後括弧 (Klammern) が誕生したということです。更には疑問符 (Fragezeichen) が 14 世紀頃イタリアにおいて、また 16 世紀にドイツ語圏においてそれぞれ初めて登場し、その後感嘆符 (Ausrufezeichen) が登場したという歴史があったといえます。そして 18 世紀には現在私たちが使用している句読点が出そろったようです。私自身は今まで句読点の誕生の歴史については考えた事ありませんでしたので、今回のテーマは新鮮で刺激になりましたし、大変興味をそそられました。句読点の誕生は、印刷技術の発明により多くの書物が流通することと相まって人類の歴史において多大な貢献をしてきたと言っても過言ではないだろうとも思いました。

ところで、放送の冒頭および課題の最後に、同じ語句群が並ぶ文においても Komma の位置により意味が異なる例が紹介されていますが、インターネットを検索したところ、いくつかの事例が掲載されていました。その中でも複数のサイトで紹介されていたものが下記の事例です。複数のサイトに掲載されていたということは、Komma の位置が重要であることを示す典型例として以前から知られていたのだらうと思います。

昔昔、ある罪人が処刑されることになった時、王様に恩赦を願い出た者がいました。それを受けて王様からの使いの者が死刑執行人に対し書状を届けたといえます。その書状には „Ich komme nicht köpfen.“ と記されておりました。王様は、"Ich komme, nicht köpfen!" あるいは "Ich komme nicht, köpfen!" のいずれを意図したのでしょうか。この書状を受け取った死刑執行人が果たしてその罪人を処刑したのか、処刑しなかったのかという結末までは記載されておませんが、Komma の位置により、「余は行くぞ、処刑するな」「余は行かぬ、処刑せよ」(いずれも私の試訳です) のように解釈されるため、まるで意味が異なってしまうという例として紹介されていました。

ところで、日本語の句読点については、一般的にはドイツ語ほどは厳密に定められていないと言われています。しかしながら、井上ひさし氏がかつて書いているように、「ここからはきものをぬいではいりなさい」などの場合には、読点を打つ箇所により「履き物」「着物」と意味が異なりますので、読点は必須です。

K. K.

2020年9月24日

2020年9月 Nr. 474

さて、今回の放送および課題においては、Wandern（場面・状況により、日本語ではハイキング、山歩き、徒歩旅行、遍歴、さすらい、移動などと表現できます）の歴史や効用が取り上げられています。

ドイツ放送の文化番組においては毎水曜日、夜間プログラムで「文化と歴史」がテーマとして取り上げられますが、その「文化」にはWandernも含まれます。取材記者のグルーバーさん（Herr Gruber）は、wandernする者は、より健康的に生活し、より明確に思考し、より多くのことを見る、と考えています。グルーバーさんはカールヴェンデル（das Karwendel）を通してバイエルン州の国境近くの山小屋に向かって歩きます。この山小屋は海拔1,800mの所にあり、いくつかのルートで到達することができますが、ミュンヘンからアルプス山脈を越えてヴェネチアへ行く長距離ハイキング・山歩きコース上にも位置します。

グルーバーさんは、イザール川（die Isar）の水源地前も通りかかるイザール川沿いの分かり易いルートに行くことに決めました。この場合にはしかしながら、急勾配になっています。グルーバーさんが森を通過すると、太陽が輝いています。しかしながら、グルーバーさんが山小屋まで到着するのにもう10分ほどのところまで来たとき、小雨が降り出しました。天気予報では雷雨が来ることを報じていましたので、グルーバーさんは雷雨が来る前に何とか山小屋に辿り着けるよう小雨の中を今までより少し早めに歩きました。

グルーバーさんが山小屋に到着すると、谷の遠くまで見晴らしがききましたので、カールヴェンデルの山頂が左右に見えました。この山小屋はハラーアンガーハウス（Hallerangerhaus）と言う名称です。山小屋の現管理人はレーナーさん（Herr Lehner）です。この山小屋は既に120年前からありますが、落成式を行ったのは1924年になってからでした。寝床は76個あります。

レーナーさんがこの山小屋で管理人を務めてからまだ9年です。夏には奥さんと一緒にハイカーの皆さんの世話をしますが、冬期には山小屋は閉鎖されています。レーナーさんは、多くの若者たちも再度山歩きについて気づいてくれたことがうれしいと思っています。山歩きをする人は大いに努力をしなければなりませんし、遠出の山歩きをする人は、遠くまで足を運ばなければなりません。大抵の山歩きをする人は自然や山歩きだけを楽しまたいと思います。この山小屋は6月初めから10月半ばまで開いています。この山小屋はオーストリアにありますが、ドイツアルプス山岳協会（der Deutscher Alpenverein）が

管理・運営しています。

ドイツ語圏住民の70%はハイカーです。多くの人は何らかのハイカー協会または山岳協会の一員となっています。2万人者ものボランティアの人々が約20万kmにも及ぶハイキング用道路の面倒を見ています。彼らは、この道路で快適にハイキングできるように気遣っていますし、ハイキング用道路に道しるべやハイカー用の標識をつけています。そのおかげでハイカーたちが自然を楽しむことができますし、道の行く先を何度も地図で確かめる必要がありません。これらの道路においてはハイキング用地図も方位磁針も持ち歩かないハイカーたちが多いのです。

昔は人は楽しむためだけに Wandern は行いませんでした。確かにある童謡においては、「さすらいは粉職人の喜びである」と歌われていますが、職人は、職人検定審査に合格した後で、マイスター検定審査に合格する目的で他の親方のところでさらに更に経験を積むためには、職人にとっては繰り返しさすらい続けることは職業訓練のために必要なものでした。しかしながら、Wandern は、おそらく職人に喜びも与えただろうと思われれます。

ところで、Wandern について、ある童謡においては以下のように歌われています。

„♪ Das Wandern ist des Müllers Lust, das Wandern ist des Müllers Lust, das Wandern! Das muß ein schlechter Müller sein, dem niemals fiel das Wandern ein, dem niemals fiel das Wandern ein, das Wandern.“

「♪さすらいは粉職人の喜び、さすらいは粉職人の喜び、さすらいは！さすらいを思い立たないのは、さすらいを思い立たないのは、だめな職人に違いない。さすらいを。」（本邦訳はテノール歌手・山根信明氏のホームページより引用させていただき、句読点を私が追記しました）

ドイツアルペン協会は150年前に設立されました。同協会の文化担当責任者であるカイザーさん (Frau Kaiser) は、マックス・ハウスホーファー (Max Haushofer) というミュンヘンの作家が同協会の最初の総会での祝辞においてアルプスへの興味がどこから来るかについて語ったことを教えてくれました。その作家はその理由を4つ挙げたと言います。第一の理由は、山々の美しさを身をもって体験できることです。第二の理由としては、アルプスは当時まだわずかしら調査・研究がなされていなかったことが来るといいます。登山者は危険と隣り合わせで生きているといえます。危険を冒すこの刺激をハウスホーファーは第三の理由として挙げたと言います。そこから第四の理由が結果として生じるのですが、それは、あらゆる危険があるにもかかわらず山に登った場合、それを自慢できたからだといえます。

カイザーさんは、ハイカーたちが当時同協会においてはそれぞれかなり異なる動機を持っていたにもかかわらず共通の目標設定で一致できたことは注目に値すると思っています。それはかなり実用的な目標でした。山に来るためには、まずは道路網を建設しなければなりませんでしたし、さらには数日間のハイキングのためには、テントを持参したくない場合、山の中に宿泊設備が必要でした。しかしながら当時山小屋はまだ山地の農民だけが保有していたのです。そこでドイツアルペン協会は、ハイカーのために新たな山小屋を建て始めました。そのような山小屋の一つにグルーパーさんは宿泊しました……。

ところで、課題においてドイツ語圏のハイカー人口が70%にも及ぶという記載がありますが、放送でも触れています通り、私もこれは実に驚くべき数字だと思いました。また、2万人ものボランティアの人々が約20万kmにも及ぶハイキング用道路に道しるべやハイカー用の標識をつけているということにも驚きました。なぜならば、私はこれらの作業は当該地方自治体の仕事だと思っていたからです。標識の制作作業や道路への取り付けなどの労力はボランティアが提供するにしても、制作費用などはどのように調達しているのでしょうか。ちょっと気になる点ではあります。

また、今回の課題で紹介された童謡について改めてインターネットで検索してみましたが、音声で今回紹介されているのは全体の五分の一位のようです。最後にはさすがに願う職人の「親方、おかみさん、どうか気持ちよく出発を許してください」というフレーズで締めくくられますが、職人の熱い気持ちが聞き手に伝わってきます。この童謡の歌詞はヴィルヘルム・ミュラー (Wilhelm Müller) が作り、メロディーはカール・フリードリヒ・ツェルナー (Carl Friedrich Zöllner) がつけたとのことです (尚、歌曲集「美しい水車小屋の娘」(Die schöne Müllerin) の最初の曲として同じ詩にフランツ・シューベルト (Franz Schubert) が作曲したものもありましたので聞いてみましたが、当然のことながら童謡とは大きく異なります)。この童謡はドイツでは人々に広く愛され、また広く知られているハイキング用唱歌のひとつのことですが、残念ながら私は今まで聞いたことがなく、全く知りませんでした。

さらに、放送および Beiheft で触れられているドイツの画家カスパー・ダーヴィト・フリードリヒ (Caspar David Friedrich 1774-1840) の「雲海上の旅人」(Der Wanderer über dem Nebelmeer) という絵画については全く知りませんでしたので、インターネットで検索してみました。Beiheft のこの箇所は、活字だけ読んだだけではよく理解できなかったのですが、1818年に制作されたこの絵をインターネットで見ることにより、Beiheft の記述内容についてより理解が進んだような気がします。たとえば、この絵画の中で後ろ姿の一人の若者が立っている場所はザクセン・スイス地方の岩山とのことですが、これも画像を見るとより明確に理解できました。また、この絵画をモチーフにした切手が

2011年にドイツで発行されたことも分りました。

ところで、Wandernに関連した日本語としてワンダーフォーゲル (der Wandervogel) を思い出しました。現在、大学のサークル活動で盛んなようですが、発祥の地であるドイツでは19世紀末にスタートし、その後ドイツと友好関係にあったことから日本においても1930年代に国により青少年運動として宣伝と普及が開始され、その後大学を中心に広まっていったようです。

ということで、今回はWandernについて様々な角度・視点から考える機会を得られ、またいろいろな事実や背景を知ることができて中々興味深かったです。また、Wandernというドイツ語を日本語に訳す際には、場面・状況を考えなければならないことも改めて認識しました。

K. K.

2020年10月27日

2020年10月 Nr. 475

今回は、ドイツのラジオ放送における宗教の番組が話題になっています。具体的には、仏教、カトリック、プロテスタントの番組が取り上げられています。

文化はラジオにおいても重要なテーマですが、そこには宗教も含まれます。放送されるのはキリスト教やユダヤ教についてだけではなく、イスラム教、仏教それにゲルマンの神々についても行われています。さらには、宗教の放送が、例えば、ドイツ放送では毎日曜日、全祝日には5分間の朝のお祈りが加わります。これは教会の放送で、教会および宗教団体が自らの手で行っています。

2020年2月9日の放送ではベルリン仏教協会が担当しました。ノアクさん(Frau Noack)はこの団体の役員会の一員です。ノアクさんが放送で語ったことは、ひょっとしたら概ね以下のように纏めることができるかもしれませんが、21世紀の3番目の10年に、人類は更なる破局を阻止するために多くのことを成さなければなりません。しかしながら、多くの人は変革を全く望みません。ものみなすべてうつろうということ、つまり諸行無常を受け入れようとはしません。ライオンの咆哮の経典においては、動物たちはライオンの咆哮を聞くと不安そうに身を隠すと書かれています。なぜならば、動物たちは過度に安定性や継続性を切望するからです。

しかしながら、人は世界をあるがままに見なければなりません。世界の諸行無常に気づくことにより初めて、存在のサイクル(Daseins-Kreislauf)から抜け出すことができます。人は、長期に亘って人を害しているものを放す訓練をする必要があります。世界をあるがままに受け入れるということは、しかしながら、受け身になったり、あきらめたりすることではなく、涅槃に到達するために仏教の訓練に没頭することを意味します。

ノアクさんが、経典を引き合いに出しているのに対して、2020年2月24日のバラの月曜日のカトリックの朝のお祈りでは聖書については全く言及がなされていませんし、キリスト教の神についても話題にされず、その代りに1人のアメリカの経営者(アップル社の共同設立者の1人であるスティーブ・ジョブズ)とあるアメリカの大学における2005年の卒業式の同氏の祝辞に言及がなされています。この祝辞において、この経営者は学生たちに、人生は自分で作り上げるように、そして人生において自分自身の役割を能動的に探し求めるように求めました。

その際には、個々の点が最後には一つの全体の中に組み入れられることを信じるべきであるし、運命へのこの確信を決して諦めてはならないといわれています。これが学生たちに行ったこの経営者の第一番目の助言でした。そして彼の第二番目の助言は、自分が何を本当にしたいのかを発見することです。なぜならば、卒業後に決める就業は人生の重要な構成要素だからです。これに満足しようとする者は、正しいものを本当に見つけ出すまで諦めてはならないのです、というものでした。

ルエリウスさん (Herr Ruelius) は、当時この演説を聴いた多くの卒業生はたぶん、にかなり普通に職業上の成功を収めたのだろうということ、しかしながら、何人かは何か他のものに対する追求、つまり人が勇気と愛をもって見つけることができる本質的なものに着手しただろうということを述べています。

„Feiertag“というのは、ドイツ放送の文化番組において日曜日および祝日の7時5分～7時30分に放送されるシリーズ番組のことです。この番組ではプロテスタント教会とカトリック教会が交替で担当します。今年2月9日に出演したティールさん夫妻 (Herr und Frau Thiel, Das Ehepaar Thiel?) はそれぞれプロテスタント教会の牧師と女性牧師です。夫妻は沈黙の重要性・意義について語りました。ティールさん (Herr Thiel) にとって沈黙は一種の空き部屋のようなもの、つまり、2個のeを含む Leerstelle (空席、空位)、言い換えると空いたスペースですが、hの綴りの Lehrstelle (徒弟勤務のポスト) にもなり得るといいます。なぜならば、沈黙はティールさんにとって、偉大な師だからです。ティールさんはこのことをスイスにおける沈黙の週で経験しました。

ティールさんは、牧師としてベルリン連邦軍病院において患者たちの面倒を見ています。ティールさんの同僚の1人は、精神科病棟の主任医師ですが、昨年、かつての修道院で沈黙の日々に参加しました。そして、そこで多くの考えをめぐらせました。日常では、集中して十分考えに没頭できていない、なぜならば、そのための十分な時間が全く取れないからだ、と思っています。彼は、それまで再三延期してきたプライベートに関する決定をそこで行いました。ティール夫人 (Frau Thiel) は、胃だけでなく、心も消化活動をする必要があります、そのためには眠り込む前にそのための時間を持つべきであると考えています。沈黙の効果・影響を経験するために、ティール夫人はラインラントのプロテスタント教会の「沈黙の家」 („Haus der Stille“) というセミナーハウスで過ごしたことがあります……。

ところで、ドイツの学校において宗教の授業があることは私も漠然と聞いて知っておりましたが、今回の放送でプロテスタントとカトリックだけでなく、仏教の授業もあることが分り驚きました。ドイツの学校教育に関しては州が所管していると聞いていましたので、州によって宗教の授業のありかたは異なると想像します。放送で登場するノアクさんはベ

ルリンで仏教の授業をしているとのことですので、少なくともベルリンでは仏教の授業も受けられるというのは発見でした。

さて、私がデュッセルドルフでかつて勤務していたのは 30 年以上も前の 1986 年～91 年でしたが、当時日本の寺院が同地に建てられるらしいといううわさを聞いたことを思い出しました。その後全くそのような情報には接しませんでした。今回の放送の Beiheft により当時のうわさ話が本当だったことを知った次第です。インターネットで検索してみましたが、大分立派な恵光寺という寺院のみならず、同じ敷地内には恵光日本文化センターも設立され、広範な文化活動を行っているのを知りました。そしてこれを設立したのは、ある精密測定器機メーカーの創業者でもある沼田恵範氏ということも分かりました。同氏は 1897 年、広島県の浄土真宗の寺院に生まれ、若い頃仏教布教のために 20 世紀初めに渡米し、かつ米国の大学および大学院で学んだ後、1930 年に 30 歳で帰国したということです。また、上記日本文化センターの設立だけでなく、米国などにおいても私財を投じて仏教伝道のため様々な活動をしていたことも今回初めて知りました。同氏は 1994 年に 97 歳で他界していますが、日本文化センターの開設は 1993 年だったようですので、完成まで見届けることができたと推測されますので、何よりだったのではないかと思います。

ところで、今回の放送で 2020 年 2 月 24 日のカトリック教会の朝のお祈りの時間に何と宗教とは全く関係のないように私には思える、スティーブ・ジョブズ氏の大学での卒業式における演説が紹介されていたとことを知りましたが、これには大変意外な感じを受けました。この日の放送が特別例外的なものであるのか、それとも常日頃からこのような宗教とは関係のない内容のものも実は度々放送されているのか分かりませんが、もし後者だとすれば、朝のお祈りの時間という番組名から受ける印象とは大分異なりますし、その意図はどこにあるのか興味深いことだと思います。

K. K.